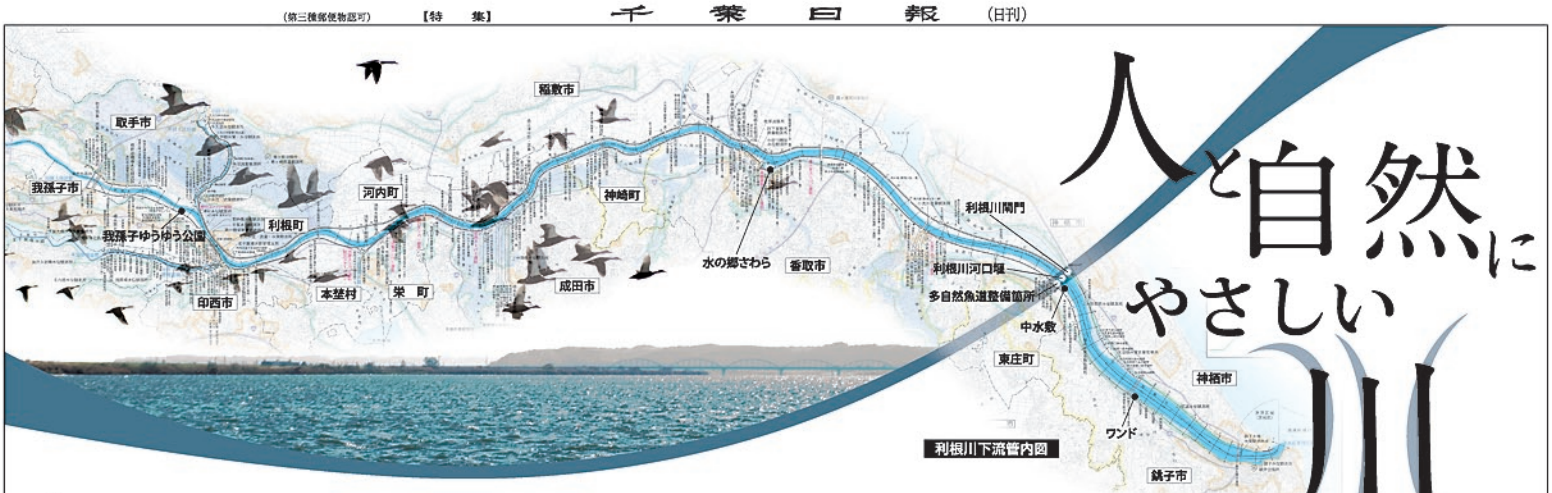
（第三種郵便物認可）　【特　集】　千葉日報（日刊）

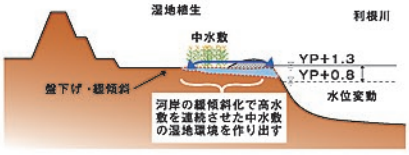
人と自然にやさしい川づくり



利根川下流部の水環境整備事業

利根川は首都圏の重要な水源となっており、水道用水や工業用水、農業用水に使われている。その一方で、利根川流域の生活排水が流れ込むため、水質の悪化が懸念されている。利根川下流部には、広大なヨシ原等の湿地帯が広がり、貴重な植物をはじめ、鳥や昆虫、水生動物など多彩な動植物が息づいており、トビやチュウヒなどの猛禽類やカモやサギなどの鳥類など多彩な野鳥の観察場所としても有名だ。だが、近年、湿地帯の陸地化がすすみ、セイタカアワダチソウが繁茂するなど湿地環境が減少。また、利根川の流量が減少すると、植物プランクトンの大量発生により川の水が赤く着色したようになり、景観の悪化を生じることがある。

そこで、国土交通省 関東地方整備局 利根川下流河川事務所では、水質の悪化を少しでも改善するため、この陸地化したヨシ原を湿地環境へと再生する水環境整備事業をおこなっている。この事業は、利根川下流部に広がる河川敷を少し掘り下げ、利根川の水を流れ込ませることで湿地帯を再現しようというもの。すでに、ポンプなどを使って水を流し込み、湿地帯を再現する手法は他県などでもおこなわれていたが、河川敷を掘り下げることで半永久的に湿地帯を再現しようという試みは、この利根川が日本で初めて。海と直結する利根川下流部では、潮の干満による水位変動があるという恵まれた自然環境があるため、ポンプを使わなくとも水が流れ込み、電力を使わずに湿地帯を作ることが可能である。工事以外は自然の力を利用するため、維持管理費用も安い。



▲湿地環境への改変概要図（高水敷を湿地化し、水環境の改善を図る）

▼河川敷を掘り下げ、湿地帯を再現。自然の力を利用した日本初の試み。

現在、東庄町の利根川下流部で着工済みで、今年3月頃には芽吹いたヨシが成長し、ヨシ原が再生する予定だ。リポーターの岡田亜紀さんも「現在は土を掘り起こした状態なので、数ヶ月でヨシ原が再生するとは驚き。ヨシ原が再生したときにぜひまた来てみたい」と語った。

河川リポーターの岡田亜紀さん

埼玉大学大学院の浅枝隆教授は「湿地帯が再現されれば、植物プランクトンが水位変動で川から湿地帯に流されて沈殿するため、水質の悪化は改善される。さらに、河川敷を掘り河川が広がることで、洪水時には全体の水位が低下し、防災効果も期待できる。また、新たな可能性としては、湿地帯の再生により多様な自然環境の生態系が形成され、珍しい鳥や魚などが増えれば、将来的には利根川下流部の貴重な観光資源としても期待できるのでは」と語った。

過去にも、自然地再生事業として、銚子市野尻地先などの利根川下流河川敷に人為的にワンド（川とつながって流れのないよどみ）や干潟を整備。結果、ヨシ原が再生されただけでなく、ボラなどの稚魚やモツゴやギンブナなどの魚類、クロベンケイガニ、ヤマトシジミなどの生物の生息も確認されるようになった。また、河川環境の改善の影響か、利根川におけるサケの遡上数は、利根大堰で過去最高を記録。昨年10月から12月の3ヶ月間で、9463匹が観測された。

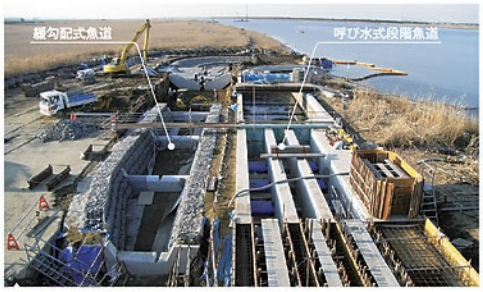
首都圏に近く、成田空港からもアクセスがよいという立地条件や、珍しい動植物が息づく自然環境などから、観光面での可能性についても期待できる。この事業により、水質の改善はもちろんのこと、利根川下流部が、広大なヨシ原の原風景的な地域として、千葉県随一の観光スポットとして成長する日も近いかもしれない。■

人為的に整備された消波堤とワンド

緩勾配式魚道の整備

昨年度から整備が進んでいた利根川河口堰（東庄町）の多自然魚道が、まもなく完成。既存の「呼び水式階段魚道」の改築（水資源機構 利根川下流総合管理所）に加え、「緩勾配式魚道」が新たに設置される。利根川下流域には80種類以上の魚類が生息するとされている。「呼び水式階段魚道」は、アユなどの遊泳力の大きな魚が利根川を遡上しやすくするために設置されていたが、老朽化が進んでいることに加え、遊泳力の弱い小型の水生生物に対応していなかった。

一方、新たに設置される「緩勾配式魚道」は、勾配を緩くし、石や土砂を使い、より自然に近い形の魚道であり、遊泳力の弱いウナギやハゼなどの小魚やカニ・エビなどの甲殻類を中心とした小型の水生動物の遡上をしやすくさせる。今回、「呼び水式階段魚道」の改築だけでなく、「緩勾配式魚道」を新設することで、より多様な水生生物がより多く遡上できることが期待される。■



まもなく完成予定の緩勾配式魚道（左）と呼び水式階段魚道（右）

水辺空間の利用状況

これまで、国土交通省では、様々な水辺空間整備事業を地域と一体となっておこなっている。例えば、我孫子市の利根川ゆうゆう公園。同省と地域の連携により整備されたこの公園は、「自然観察ゾーン」「スポーツゾーン」「ファミリーレクリエーションゾーン」「自然緑地ゾーン」など4つの区域に分けられ、多様な目的で住民が川を楽しめる施設を設置している。ビオトープに生息する動植物を観察する自然観察会やスポーツゾーンを利用したスポーツ大会なども行われ、近隣住民の憩いの場として親しまれている。整備後、利用者数も年々増加し、年間約4万人以上が公園を利用している。

また、ゆうゆう公園の対岸の茨城県取手市小文間にも芸大緑地と呼ばれる広大な自然公園が広がり、陸地の自然や利根川の風景を楽しめるサイクリングロードがある。

今年は千葉県で国体が開催されることもあり、栗山川特設カヌー会場、小見川ボート場などで水上競技が行われる。特に、栗山川のカヌー会場は、利根川から取水した水を、両総用水を通して栗山川に流し、人工的な急流を作るという試みをおこなうものである。人が自然や川と慣れ親しむことで、両者にとってさらなる有効な関係性を築いていきたい。■

香取市佐原広域交流拠点「水の郷さわら」の水辺交流センター周辺。道の駅や防災施設などを整備中。3月27日にオープンします。

千葉日報社では下記の意見募集をおこないます。

1. 文中にわかりにくい用語はございましたか？　A. なかった　B. あった（　　）
2. 水辺の環境保全対策について、他にどのような情報をお知りになりたいですか？（　　）
3. 河川敷をどのように利用されていますか？　A. スポーツ　B. 釣り　C. 野鳥観察　D. その他（　　）
   また、どのような整備を期待されますか？（　　）

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-10-12　銀座サマリヤビル 4F
『千葉日報社 1／24 アンケート係』
FAX 03-3545-1450　Eメール tokyo@chibanippo.co.jp

住所、氏名、電話番号をご記入の上、はがき、FAX、またはEメールにて左記までお送りください。（2月末日必着）。ご応募いただいた方の中から抽選で10名の方にクオカード3,000円分をお送りいたします。発表は発送をもって代えさせていただきます。

外来生物について

近年、外来生物が、生態系を乱したり、農林水産業などに影響を与えたり、直接人間に害を及ぼすなど、社会的な問題になっています。例えば、カミツキガメやアライグマなどが野生化して在来生物の生息を脅かしたり、北米原産のブラックバスが人の手によって川や湖に放流され、在来種を減少させたりしています。また、河川堤防に群生するネズミホソムギの花粉により、周辺の小中学校で花粉症が集団発症した例もあります。ペットなどをむやみに川に捨てるのはやめましょう。

国土交通省 関東地方整備局 利根川下流河川事務所　調査課 ☎0478-52-6366　www.ktr.mlit.go.jp/tonege/